

日本國語大辭典

第三卷

編集 日本大辭典刊行會

發行 小學館

日本國語大辭典

第三卷

編集 日本大辭典刊行會

發行 小學館

日本国語大辞典〔縮刷版〕 第三卷

昭和四十八年九月一日 日本国語大辞典 第五卷発行◎
昭和四十八年十一月一日 日本国語大辞典 第六卷発行◎
昭和五十五年二月二十日 同 縮刷版第一版第一刷発行◎

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相賀徹夫

印刷者 小林清

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二一三一一

電話 製作(二三〇)五三三三
販売(二三〇)五七三九

〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

*造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁
などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

0581-420003-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

編集顧問

金田 一 京 助
佐 伯 梅 友
新 村 出
時 枝 誠 記
西 尾 潜 実
久 松 一
諸 橋 轍
山 岸 德 平

編集委員

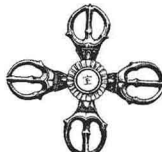
市 古 貞 次
金 田 一 春 彦
見 坊 豪 紀
阪 倉 篤 義
中 村 通 夫
西 尾 光 雄
林 井 栄 大
松 井 栄 一
馬 淵 和 夫
三 谷 栄 一
山 田 巖
吉 田 精 一

(五十音順)

かつま【勝間】『名』「かたま(堅間)」に同じ。

かつま 羯磨(名)梵karmaの音訳。仏語。①天台宗、淨土宗などではかつま、律宗、真言宗などでは「こんま」という。業・作業、所作(な)と訳す。広義には儀式、作法のこと。通常は戒律上の受戒じゅけいをい、懺悔さんげ、結界(けっかい)などの折の作法をい、密教では如来のはたらき、諸師の威儀など儀軌に用いる。醍醐寺の本元寺(加藤緑起并流記資財帳)天平一九年(又半月々々為白羯磨)②「かつまこんごう羯磨金剛」の略。參天台五台山記四〇「独召四枚羯磨四枚、轡一枚、轡八枚」・異制庭訓往来、火舎、輪宝、羯磨轡及錫杖・如意。

黄言 國色色葉、易林



掘磨金剛（奈良県 室生寺蔵）

かつまごころう：コンタクト【羯磨金剛】（名）仏器の
一つ。密教修持具。三鉗片（さんしんこし）を十字に組み
合わせたもの。仏に本来
備わっている智慧（ちえ）
のはたらきを象徴する金
剛片の一種。多くは銅で
つくる。羯磨：*寂照堂
谷響集六、羯磨金剛者、
横堅にす三股片、是故号
云三十大日印、謂鉄三股
の金、*大日経疏一六、其作法者、先作四方漫荼羅
其唯用羯磨金剛智印、
かつまごころうもくろく カツマゴコろう【羯磨金剛目



羯磨金剛（奈良泉 室生寺蔵）

録）（伝教大師最澄の書跡。延暦二十四年（八〇五）七月唐から帰国の際持ち帰った品を比叡山に納めた時の自筆の目録。首部が欠け、書き出しに親麿金剛とあるところから、名がある。国宝。延暦寺蔵。かつまた（勝又）姓氏の一つ。関箇鑑之図）

かつまた【且又】（接続）（接続詞かつ）に副詞「また」

の付いてできた語。先行の事柄に後行の事柄が添加されることを示す。その上に、さらにまた、*大鏡六・道長下「もしまことに聞こしめし果てまほしくば駄一疋をたまはせよ。はひ乗りて参り侍らん。且又

御宿に参りて、影の御才學の何とぞ承はらまほしう
思たするやうは、★雑俳・柳多留二九「又又は地下
人のするたまくら」★和英語林集成(初版)「Kagami
Hatake カツマタ 且又」★細君△坪内逍遙三「当世の
紳士に連添ふものは、誰れかさる筋を細君の義務と
観じ、浮世の習ひと誦めざらんや。且つ又、夫は外出
好きにて」今史室町○○●○○○

○阿棟 余友(友) 吉野書畫
かつまたのいけ「勝間田池」奈良市西ノ京町の、薬師寺の北にあった池とも、また、薬師寺南西の七条大池のこともいわれる。*万葉一六三八三五「勝間田之池かつまたのいけは我れ知る連(はちす)無し然しか」言ふ君が贅(ひけ)無き如し「新田部親王姫人」*枕三八・池は「池はかつまたの池。磐余いは

れ)の池

かつまもめん【勝間木綿】『名』「こつまもめん(勝間木綿)」に同じ。
 かつまる『名』「がじゅまる」に同じ。*南島志下「楡

俗曰加津末留」・和訓栞後編「かつまる 近世渡来の木也。つば木に似たり。琉語なるべし。花も椿のごとく白し。南島志に楡也といへり、心得がたし」かつみ『名』植物「まこも(真孤)」の古名。・金葉・秋・

二〇六 蘆根はひかつみも茂き沼水にわりなく宿る
夜半の月かな（藤原忠通）・東因紀行「京より武佐
「洲崎、所々に入りちがひて、あし、かつみなど生ひわ
たれる中に」・俳諧・奥の細道「あさか山」「檜皮（ひは
だ）の宿を離れてあさか山有。路より近し。此あたり

沼多し。かつみ刈比（ころも）やや近うなれば、いづれの草を花がつつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更（さら）に知人しるひとくなし。沼を尋、人にとひ、かつみかつみと尋ありきなり。

(1) カタミ「糧義の転」古今要覧（大言海）。(2) カタアミ「堅編」の義のカタミの転（碩鼠漫筆）。開園全書もガツギ（秋田）

古辞書

かつみぐさ《名》植物「まこも真狐」の古名。《李・夏》。虎明本狂言「鳴石」あさかぬのなまはかつみぐさ、しのぶの里にはまじずり石・日葡辞書「Cataglyphis」(カツミグサ)「訳」淡水に生える草の一種」*譬喩尽二「且見虫(カツミグサ) 真狐を云 笹虫(かたみぐさ) 同上」(発音カツミグサ 續二)

かつみょう：ミヤウ渴命「名」「かつめい(活命)」に同じ。『正法眼藏隨聞記』三・一三「明日明年の活命を思うて仏法を学せんは」・日蓮遺文四思鈔「無智無戒にして髪ばかを剃りて守護神にも捨られて、活命のはかりごとならん」

かつみょう：ミヤウ渴命「名」「かつめい(活命)」に

同じ。*天理本狂言・塗師「あの人に計、あつらよふず、そちのかつみやうはあるまひと云」*運歩色葉「渴命カツミヤウ」*浮世草子・日本永代蔵一二五「諸事を兼々たくはへ置し故に渴命(カツミヤウ)に

かつみん「黠民」^{〔名〕} するがしこい人。悪知恵のはたらく人。黠奴（かつど）。＊新聞雑誌五一号・明治五
年六月・其間奸吏随私曲を逞（たくま）しめし、黠民
（かつみん）に従て狡詐を恣（し）はしひまにすることを得べし。＊明六雑誌三五号・天降説阪谷泰「甚しき
者は其私意を弄し、風吏黠民の欺詐に迷ひ」＊漢書！

匈奴伝下、烏桓と匈奴無狀、黠民共爲、寇入塞、
如中国有盜賊耳」
かつむし（勝虫）『名』昆虫とんぼ（蜻蛉）の異名。
かつめい『タツ』『活命』命を支えること。生活
すること。なりわい。かつみょう。＊新編追加一延応
二年五月一二日中世法制史料集一追加法一四二
「寛喜創飢之境節、或活子却子孫、或放券所從、充活

命計之間」・易林本節用集・活命クツツメイ」・読本忠臣水滸伝後一〇回我等父子身上つづがなく、今当地にすみてすぎはひをたしぬ。活命(クツツメイ)の洪恩いかにかわすけを待らん」・西国立志編「中村正直訳」一一四「永く警悟の期なく真正の活命ある人となることは得がたかるべし」

書言

〔国語編易林〕

かつめい「渴命」名 飢えやかわきのために命があ
ぶなくなること。また、その御。かつみよ。一陽
命鑒品四〇下 いはれぬ主君の御蔭だ、おのれが渴
命をつなぐほどに如此。一浮世草子 武家義理物語
六三 女心にかななく是をなげくに甲斐もなし。道
を立たちてひとりくらせば、かつめいにおよび」

●雑俳・柳多留 初「御勝手はみなかつ命(めい)におよんで居」
かつめんタツツ：「滑面」「名」なめらかな表面。特に地質学で、断層面がみがかれたようになめらかなものを。鏡肌(かがみ)はた。〔笑〕
〔因〕植物。真菰(まこも)。群馬県勢多郡

かつも【且】〔副〕〔副詞〕「かつ」に助詞「も」の付いてできた語。一方でまた。＊万葉八・一六二秋風の寒きこの頃下に着む妹いもが形見と可都毛(カツモ)しのはむ△大伴家持」

かつもく【かつ・刮】△「名」△「刮」は、こするの意) 目をごすつてよく見ること。注意して見ること。刮

眼かつがん。●隨筆・茶山翁筆のすざび。一中秋の月へ略・尻海といふところに舟を泛（は）ろくしに天氣不快、尙聞月はいと刮目（クツモク）する」と書中に云ふ。●開化評林 岡部啓五郎編明治七年・参議勝公廬懷本君書 実に鬼神遶來の名に愧さる忠勇の士なるに刮目敷服せしのみ。●当世文学の潮模

様へ北村透谷「当代文学の潮流真に憂ふ可き者あり。刮目(クワツモク)して爾後の傾向如何を見ん」。吳志呂蒙伝裴注「蒙曰、士別三日、即更刮目相待」〔笑〕
會了〇 余了〇

かつもって〔且以〕韻(副詞)かつにもつての付いてできた。断て。下に打消を伴つて、強い否定の気持を表わす。斯うして。全然。＊浄瑠璃、義経千本桜四「静御前を預けしなど御殿の趣おもむき、かつ以て身に覚へ候はずと」＊雑俳、柳多留拾遺上巻一四下「かつもつてなどとちんじる草履と也」＊合巻・修紫田舎源氏四「京近きやうちかなる田舎田舎を尋ね

廻(めぐり)候(こう)へども、かつもつて手懸(てかけ)りなく」
易林

かつもといへいいちろう：セイイチラウ(勝本清一郎)文
批評論家。東京に生まれる。慶応義塾大学卒。昭和
初年かプロレタリア文学運動に加わり、ドイツに
渡り国際革命作家同盟の活動に従う。のち、近代日
本文学の文献的研究に業績を残す。著に「前衛の文

学、日本文学の世界的地位」近代文学ノート」など。
明治三二・昭和四二年（八九九・一九六七）
かつもり『名』植物やえなり（八重生）の異名。＊物類
称呼一三「緑豆」ぶんどう 東国にて、やへなりといふ
又、とうろく共ぶ 畿内にて、ぶんどうといふ遠
江にて、とうご云 備前にて、さなりといふ 伊勢
にて、かつもりといふ」内蔵①りよくず（緑豆）。静

岡県藤枝560 ②まくわうり(真桑瓜。愛知県一部024
かつやかかす【創】他サ四) (かすは接尾語 飢へ
させる。ひもじくさせる。飢(かす)えさせる。・差
草十五・「鉄田十六のと終にかつやこしころし
けり」・仮名草子・為愚懸物語一・八「その身食に飢、
砂をくらひ水のみて死せし事は、母をかつやかせ

し因果によつてなり」〔補註〕為愚癡物語の「かつや
かせし」は近世の慣用語法、正しくは「かつやかし」
になるはずのもの。
かつやくとクワツ〕〔括約〕〔名〕しめくくすること。集め
て一つにすること。
かつやくとクワツ〕〔活躍〕〔名〕①勢いよくおどること。
＊活弁にはねまわること。＊喜童は猫である。＊目

漱石七「苦しがつて羽根を振(ふる)つて一大活躍を試みる事がある」(2)大いに手腕をふるうこと。
・満韓とところどころ(夏目漱石「三」其標悍が今蒙古と新しい関係が付いた為、頗る活躍してゐる)〔完吉〕
・新し(○)金(○)
かつやくきん タツツタツタ「[括約筋]『名』収縮と弛緩(し

かんとよって、生体の器官を開閉する輪状の筋肉の総称。肛門部、尿道の周囲、胃の幽門部、瞳孔の虹彩などにある。●改正増補和英語林集成「Kwasu-yakin クワツヤキン 括約筋」●明暗夏目漱石「一五三 括約筋(クワツヤキン)を切り残したと仰しやるけれども」●銀二郎の片腕見尋「彼の耳の穴

は、恰もそこに括約筋(クワツヤクキン)が出来たやうに、へ略大きくも小くも、自在に締めたり緩めたりすることが出来るやうになつてゐた」(発音・繪之)

かつやま 〔勝山〕 ①福井県北東部の地名。九頭龍くずりゅうの川に沿い、小笠原氏の旧城下町で、藩政時代は勝山煙草の栽培で知られる。現在は機業工場が多い。昭和九年（一九五〇）市制。②岡山県北部の地名。旭川に沿い、もと高田と称し、三浦氏の旧城下町。③千葉県南西部、鋸南きょなん町の地名。海水浴場、漁業基地として知られる。加知山（かちやま）

ま)。〔栄国(繪之)〕
 かつやま 勝山 姓氏の一つ。〔栄国(繪之)〕
 かつやま 勝山 江戸中期の遊女の名。同名の遊女は数人いたが、中でも江戸吉原新町、山本芳潤抱えの勝山が最も有名。初め神田の紀伊国屋風呂島の湯女(ふな)であったが、承応二年(一六五三)吉原に移り、太夫となった。だてな異風を好み、丹前風たんぜ

の。刺身のつまなどに用いる。④植物に「ついで」

(肉桂)またけいひ(桂皮)の異名。改正増補和英

語林集成「Kakka カツラ」桂皮または肉桂皮。ニ

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑤植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑥植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑦植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑧植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑨植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑩植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑪植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑫植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑬植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑭植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑮植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑯植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑰植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑱植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑲植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。⑳植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉑植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉒植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉓植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉔植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉕植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉖植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉗植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉘植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉙植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉚植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉛植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉜植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉝植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉞植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㉟植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊱植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊲植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊳植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊴植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊵植物に「ついで」

を「めかつら」を「かつら」と同し。㊶植物に「ついで」

桶を載せて快もつじが花を折るかな

かつら 焼き玉(たまき)炊かし。①(戦国策「楚策」

の「対」楚國之食貨、穀、新貴、於桂、こから)日

常必要の品さへ桂より高く思われ苦しむという

話をいう。また、頼みのとげられしことをいう

桂玉(けいぎょく)の類(かん)。志濃夫遺歌集

春明草「桂焼き玉かしがする年ごろを藻塩の煙わ

びやたつらむ」

かつらを折る(すぐれた人材を桂の木の枝にた

たとえた「昔書諸説」の故事から)昔官吏登用試

験に文章生(もんじょうしやう)が及第すること

をいう。源氏「藤原朝」かざしてかつらとどる

草の名は「つら」を「つら」といふ。拾遺雜

上四三七「久方の月の桂のおる許(ばかり)家の風

を吹かして戦道(みち)あり。今鏡一・雲井廿二

日に上東門院に御幸(みゆき)ありて。かつらをお

る試みせさせ給ふ。白居喜喜歌中及第詩「桂折

一枝 先計我 楊穿三葉(尽)人」

かつらを科(か)ぞえて「科(はかりて)炊かし」

(戦国策「楚策」の「対」楚國之食貨、穀、新貴、

於桂、こから)桂より値段の高い薪と、玉より値

段の高い食物とよって尊る意にとつて。富貴

な、たいくたな生活のい。説本「楊説弓張月」

後二六回「前後後生のいめしに冊(かし)つ

れ、桂カツラを科(カゾ)て炊(カシ)し。玉を

科(カゾ)て食(カシ)ふ。富貴高ふたつながら得たりし。玉を

本句「説書」七二。〇「米には玉を科(はかりて)

食(カシ)ふ。薪には、桂カツラを科(ハカリ)て炊(カシ)

ガシ、餅にまはし、被に臥(ふ)す」

かつら【髪】(かづら)とも①上代「青柳」アヤ

メ、ムリ、藻草、種々の種々の植物を、髪に飾りし

したものを。うす、かざしが枝のまま髪に突きさ

せたりして用いた。元来は、植物の生命力を身に移

そうとした。感染呪術に基づく。万葉一五八七

「梅の花咲きたる國の青柳(あやめ)をよき可豆良(カヅ)

ラにすべくなりけるにけり」(アヤメ大夫二名未詳)

・靈異記上「緋の綴(カヅ)を頼ぬかに著け、

赤き繻袴(はたは)を繋ぎ上げて八興福寺本訓歌

集「可川良」・紫式部日記「寛弘五年一月二〇日

「五節は廿日ある。略右宰相中侍の、五節にかつら

き取りて、髪(かづら)にせむとて抜くなり」③種

種の髪型に作つて頭にかぶるようになったもの。も

と演劇用として発達したが、現在では髪型を變えるた

め大念仏上「彦六郎は非なく女の髪を被(か)り、小

袖を着る(は)面を著て、即興詩人森蘭外歌、謝小

頭に戴けるは「フイノキ」八俗曲中に「無遠慮

なる公民を代表したる役なり」の髪型カツラに

て④植物「かもしぐさ(髪草)」の異名。⑤植物(1)

カツラ「髪草」の略(支那方言「雅言考」大言海。

根しらべ給江津。髪にツラナル(聯)義「日本語

源流」百選(3)首蔓の急呼(髪注和名抄)。(4)園

會中世まで「かつら」は、近世以後「かつら

かつら」の同義となり、現代では能楽関係ではカス

ラ、その他はカツラと発音している。⑥園會中「余カ

ズラ」(4)園會中「余カツラ」(4)園會中「余カツラ」

かつら【桂】(かづら)とも①京都府桂川西岸の地名。桂離宮が

ある。源氏「松風」かつらにあらはるべきことと

いさや心にあつてはどへにけり。俳諧「初心も

柏葉の花や定も桂もわすれ」(4)園會中「余カツラ」

かつら【桂】(かづら)とも②幕末、明治初期の政

治家。木戸孝允(たかよし)の名。名は五十郎。

新島襄出身。早稲田大学教授。根岸派に属し漢詩

にすぐれ、陶器の研究でも知られる。著「漢語解

題」。明治元・昭和三年(一八八六・一九三八)

かつら【桂】(かづら)とも③政治家。陸軍大將。長州藩

出身。山県有朋の直系として陸軍次官、各内閣の

陸相を経て閣内にドイツ式兵制の確立、北清事変へ

の出兵などにあつた。明治三四年(一九〇一)以

後三回組閣。日英同盟を結び、日露戦争を断行。

社会運動を弾圧し日韓併合を行なったが、第三次

内閣は憲政擁護運動の攻撃を受けて崩壊。弘化四

一(大正二年)一八四七(一九一三)

かつら【桂】(かづら)とも④大阪の落語

家。本名、川田藤吉。後姓、岩井。桂文我、のち七代

桂文治入門。旧來の上方落語の風を破り、奇抜

なナンセンスを取り入れた新しい芸風を樹立。明

治一四・昭和二年(一八八二・一九一七)

かつら【桂】(かづら)とも⑤落語家。四代の長

男。前名、文三(三代)。後名、美鶴。江戸の人。道具

入り芝居新し(いばなし)を得意とし、「上野戦

三八(一九四)⑥八代。本名、並河益義。前名、さ

ん生、馬之助。桂小南、八代桂文治、五代柳亭左

入門。きこまな演出、芸風で知られた。明

治二五・昭和四年(一八八二・一九一七)

かつら【桂】(かづら)とも⑦落語家。二代。本

名、松尾利雄。二代桂南光、橋家子喬(たけなや

えんき)ように師事。東西落語の生き字(し)と称され

舞踊にも巧みであった。明治二七・昭和(一八八

八・一九四一)一九三三。⑧三代。本名、小林七郎。前

名、柳昇、小柳桂、橋の円(まどか)。春風亭柳橋二

代三木助に師事。江戸前の繊細な芸風で人気を得

た。明治三五・昭和三年(一九〇二・一九一六)

かつら【桂】(かづら)とも⑨京都府桂川西岸の地名。桂離宮が

ある。源氏「松風」かつらにあらはるべきことと

いさや心にあつてはどへにけり。俳諧「初心も

柏葉の花や定も桂もわすれ」(4)園會中「余カツラ」

かつら【桂】(かづら)とも②幕末、明治初期の政

治家。木戸孝允(たかよし)の名。名は五十郎。

新島襄出身。早稲田大学教授。根岸派に属し漢詩

にすぐれ、陶器の研究でも知られる。著「漢語解

題」。明治元・昭和三年(一八八六・一九三八)

かつら【桂】(かづら)とも③政治家。陸軍大將。長州藩

出身。山県有朋の直系として陸軍次官、各内閣の

陸相を経て閣内にドイツ式兵制の確立、北清事変へ

の出兵などにあつた。明治三四年(一九〇一)以

後三回組閣。日英同盟を結び、日露戦争を断行。

社会運動を弾圧し日韓併合を行なったが、第三次

内閣は憲政擁護運動の攻撃を受けて崩壊。弘化四

一(大正二年)一八四七(一九一三)

かつら【桂】(かづら)とも④大阪の落語

家。本名、川田藤吉。後姓、岩井。桂文我、のち七代

桂文治入門。旧來の上方落語の風を破り、奇抜

なナンセンスを取り入れた新しい芸風を樹立。明

治一四・昭和二年(一八八二・一九一七)

かつら【桂】(かづら)とも⑤落語家。四代の長

男。前名、文三(三代)。後名、美鶴。江戸の人。道具

入り芝居新し(いばなし)を得意とし、「上野戦

争」「高橋お伝」「西郷隆盛」などの際物(きりもの)を

上演。弘化三・明治四年(一八四六・一九一七)

かつら【桂】(かづら)とも⑥落語家。四代の長

海を秋は明石の浦といはん(聖傳)・雑俳 柳多留(七)「かつら男のやせこけて出る闇あがり」②「かつらおと」(桂男)②に同じ。俳諧・古今俳諧明題集(夏)桂壮士(カツラ)の人はささるすずみかな(ささる)。

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」



蟹桶

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

②に同じ。・白羊宮(海田)泣き望郷の歌「桂をとめは河しにも染路やなほこりする鮎波なり」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

い。万葉一〇二二三(天)の海に月の船浮(う)け桂樹(かつら)かけて漕ぐ見ゆ月人(つ)きとを(と)作者(ま)待(き)。

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

安政五年(一八五八)、オランダ人ズーラの作成したズーラ・フルム(和蘭字彙)を出版。文政九(明治四年(一八六八))

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

かつらおとぎ・あま(「蟹」)「(かつらおとぎ)」も「能楽で、蟹物のシテが用いる黒骨、端紅(つまくれない)の絵羽。〔開園カッラオギ 能楽〕」

さらされた着たるが。俳諧・本朝文選五・序類。番椒序・野坡・大かたはづら髭の益雄・ますらををかしづかれて。②「すらかる」の音順を変えた「かすら」の略からの連想による語。逃走することをいう。盗人仲間隠語。〔隠語輯覧〕

かつらひし〔桂妻〕名。鳥さかつら(酒面雁)の異名。重訂本草綱目啓蒙四三・水禽(雁略一種)さかつらひし一名かつら。仙台・かつらひし(濃州)かつらひしと桂人(名)。(かつらひしとも)山城国(京都府)桂の里の人。新撰六帖三三の川に小夜更ふけぬらしかつら人鶴髪手にまき船くだす也(藤原光俊)。玉葉夏三七九かつら月原の光のささぬ夜の桂舟に棹は取るらし(藤原実兼)

かつらひねり〔髻〕名。(かつらひねりとも)毛髪をひねりついで。髻②をつくること。また、その職人。三十二番職。歌合・五番・髻。花髻お髪なばらひろひ置きひねりついで。かつらひねり。随筆・嬉遊笑覧。下職人図集におちまひは都の西常盤といふ処より出るとかや、女の頭に袋をいただき髪を落をかひかもしにして売買世渡るわざとす。略は是かへのかづら拾りと同じ。

かつらひめ〔桂姫〕名。かつらめ(桂女①)と同じ。歌舞伎・幼稚子敵討・日明・大坂表袍産安産の守りを出さしめる桂姫様の事にごさませう。随筆・柳多留四〇「さし汐に参内をするかつら姫」。雑俳一話一言一二桂姫一人、毎年始八朔、所司代へ御礼として来る。扇子一台上なり。目見有之鳥目一貫文下る。



桂 巻(福富草紙)

かつらひも〔桂紐〕名。(かつらひもとも)「かつらまき桂巻」に同じ。

かつらぶね〔桂船〕名。山城国(京都府)の桂川を通う船。為尹千首巻霞みてもそれは見えるかつら舟丹川ひるる程や消ゆらん

かつらぼうひん名。(かつらぼうひんとも)ヤマノイモをいう。盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕

かつらまき桂巻名。室町時代、長い布で鉢巻きのように頭部を包み、前で結んだ下駄のもの。京都桂女かつらめ風俗からはじまる。多く、庶民の女子の風俗。桂包み。桂紐(かつらひも)。髻帯(かつらおび)。俳諧・松川・冬二、髻にかつらまきといふあれば、鯨突つなや正木のかつらまきへん

かつらむき〔桂刺〕名。大根、胡瓜など、五・一六センチの輪切りにしたものを、中心に向かって渦巻状に薄くむいて長い带状にするむき方。かつらはぎ。

〔閑園會②〕

かつらめ〔桂女〕名。①巫女(みこ)の一種。山城国

(京都府)葛野郡桂村に住み、伏見の御香宮(こうのみぎ)に属し、石清水八幡宮にも仕えた。中古、諸家の祝事に訪れて祝言の職をしたりして、女系相統の制度を明治初年まで続けた。桂姫。②山城国(京都府)桂の里の人。桂川の鮎や桂船を京都の町で売り歩いた。桂乙女。頼政集。かつらめ新枕する夜な夜なは取られし鮎の今夜取られぬ。東北院歌合一首・桂女。略・恋ひわけて潮に臥す鮎の打ちさげれ骨と皮とにやせなりけり。随筆・一話一言一二桂女かつらひにやせなりけり。御礼として三四人づつ来る。年始に鮎、八朔に菓を上る。白羊宮・薄田泣草・小雀と桂女。別れた人に会ひたす、今日も野へ来た桂女(カッラ)は、路の瑞樹(みづき)の葉がくれに。③山城国(京都府)桂の里から出た遊女。一説に桂巻(かつらまき)をした遊女ともいふ。随筆・貞丈雑記一二かつらとも桂女とも云は山城国桂の里より出る遊女也。④昔、貴人の婚礼の時、花嫁の供より出る遊女。古くは、賤女はしためなどが山城木綿(やましろもめん)を髻(かつら)にした。新歌舞。かつらをんなもあるやらん。或書に桂女と嫁入に嫁しるを執て新婦に従行女を云と。随筆・春浪漫話一二今の世に婚礼の時桂女と誤れる事にや。〔閑園會②〕

かつらゆう〔ゆふ〕名。木綿(木綿)。(かつらゆうとも)髻①に用いるもめん。延喜式・五神祇・齋宮登壇・斎内親王在京深齋三年・略・参入齋殿・齋宮登壇・時先供御簾・次齋木綿・其料安云木綿四兩・麻二斤・和訓采・かつらゆふ・木綿也。略・今猿蓑の女の形に金襴なうて顔をゆふは、此意風成(べしといへり)かつらき。〔桂難〕名。京都市右京区にある難宮。正親町(おきま)天皇の皇孫桂宮の別邸として元和六年(六二〇)頃創建。古書院、中書院、新書院と庭園かななり。月波楼・松翠亭・笑意軒・園林堂などの茶亭が点在。日本建築と庭園の独自の美しさを示し海外にも知られる。明治四十四年(一八八二)以後宮内府所管。〔閑園カッラリキョー 會② 余②〕

かつらん名。承知、認知をいう。盗人仲間の隠語。隠語輯覧

かつりクッ。〔活理〕名。実際に活用できる道理、または論理。開化のはなしは空想狂序・頗る寓言に涉ると雖も、論する所活理有て存す

かつり〔割難〕名。一人、国と国などの間を割き互いに仲が悪くなるようにすること。日本外史・七足利氏正記・自業・自難・割難・親親・公何忍也

近世紀聞・桑崎延房三二・長州の声威を跋み又随つて其間を割難(カッラ)往(サキ)ハナシ(ナシ)と云ふるもあれば、経国美談・矢野龍溪・後・一四・今日の

斯波多人民夫得た何の故を以て敵邦齊武を他の十ニ邦と割難せんと欲するか

かつり〔點名〕名。不正をはたらく役人。奸吏(かんし)明六雜誌三八号・転換蝶蝶説飯谷素・北海道開拓點吏募民の土人を愚弄し。漢書・尹翁歸傳(「泉里收取點吏募民、案致其罪、高至死於死」)

かつり〔點唐〕名。するがし、外国の民、いやし未開の蛮人。本朝文粹・二、應對平將門符尾張言變、官軍點唐之間、無憂愛國之士乎。佳人の奇遇・東海散士一・中華の言辭を解し、甘んじて點唐(カッリ)の奴となり。後漢書・伏湛伝・滄陽之地、逼接北狄、點唐困迫、必求其助

かつりようクッ。〔月令〕名。月々に行なわれる政事や儀式などを記録した。特に、「礼記」の月令篇が、かつりようといふと読みならわすところから、それをさすことが多くなつていふ。読本・椿説弓張月一・拾遺考証(抑そそも、彼国は、北極地に入ること二十六度三三分三厘、暖気他国に勝れて、正月に桃の花開き、枇杷熟(みのり)十二月に氷なく、蚊声を取おさめず、と伝信録月令クッツレウ)の条下、くだりに見えたり。礼記・月令「日月令者、以(其記)十二月政之所行、記也」

かつりようクッ。〔活力〕名。活動のもとになる力。生命力。また、生活する力。改正増補和英語林集成「Katsureki」クッツリョク 活力。それから夏目漱石「其時彼は自分から自分の活力クッツリョクに充ちてゐない事に気がつく。士長塚節六草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは鳴くことを止めまいと努める」

或る女へ鳥武郎・前二「海から来る一種の力が体の隅々まで行き亘って、うづうづする程な活力を感じよ。かつりよう。〔活力〕名。生命には物理や化学の法則だけでは説明できない特別な原理としての活力があるという説。生気説。

かつりクッ。〔活鱈〕名。生きた魚。白居易題海國屏風詩「万里活鱈、百川多三倒流」

かつりりんクッ。〔月輪〕名。がちりん(月輪)に同じ。

かつりんじクッ。〔月輪寺〕名。京都市右京区にある天台宗の寺。山号鎌倉山。天応元年(七八)慶俊の創建。関白九条兼実が墓所(木心)した所として知られる。〔閑園會② 余②〕

かつりい〔葛藤〕名。(葛)はくす。葛はふじかすの意。二老樹枝を交へ、葛藤(カッリ)蔓を垂れ。詩経・周南・樛木・南有樛木、葛藟荒之

かつれ名。因國春の朝など遠く山がぼんやりとす現象。かすみ。山口県豊浦郡・岐岐・愛媛県松山

かつれい〔割礼〕名。男女の生殖器の一部を切開する習俗。特に、男性の陰茎の包皮を切ることで、出生直後に行なう民族もあるが、思春期頃に行なわれるのが普通。古来ユダヤ教の儀式として有名。改正増補和英語林集成「Katsurei」カッレリ 割礼・引照田新聖書・創世記・一七・神またアブラハムに言たまひけるは、略・汝等の中の男子は咸く割礼カッレリを受けし。略・汝等其腸の皮を割き(べし)は我と汝等の間の契約の徴しるしなり。〔閑園カッレリ 會② 余②〕

かつれきクッ。〔活歴〕名。明治初期から中期にかけての演劇で、在来時代の荒唐無稽を排し、史実を重んじて歴史上の人物をそのままに現わすとした演出様式のもの。依田海海、九代目市川團十郎らが主張し、河竹黙阿彌・福地桜痴らの協力によって実現された。この語は仮名垣魯文が嘲笑的に用いた「活歴史」という言葉による。代表作に「伊勢三郎」春日局など。劇場改良法・中村善平編・演劇改良会の創立をきいて、男見を述べ、如何に演劇風(し)はるか流行(は)やつて、別して近年は其沙汰が烈しく。〔閑園會②〕

かつれきぎクッ。〔活歴劇〕名。歌舞伎狂言のうち、活歴の演出による時代物。〔閑園カッレキ 會② 余②〕

かつれきぎものクッ。〔活歴物〕名。歌舞伎狂言のうち、明治期に初演された史実に忠実な脚本の総称。〔閑園會② 余②〕

かつれつ〔割製〕名。分割すること。割れ裂けることを主とする。後漢書・文苑伝・杜篤・深之句奴・割製玉庭・唐書・漢北・三・勅部連

カツツキ(beat)名。牛、豚、鶏などの肉に小麦粉と小麦粉・パン粉を順につけて衣を作り、油で揚げた料理。カツ。内地雑居未来之夢・坪内逍遙・五・カテラレの一番にかつれつを食へるんだ。冬の宿・阿部知二・一四・焼鳥がある。脂臭いカツレツが揚つてゐる。〔閑園會② 余②〕

かつれい〔飢餓〕名。自ラ下二「かつれい(飢)の変化した語。倭語解説・飢餓・飢ウエル。又云「飢」は「カ」カ。秋田県鹿角郡・佐渡・富山県磯波・奈良・島根県・徳島県・愛媛県・対馬・長崎県・五島日島(かつる)熊本県

かつれた石見・山口県・井・愛媛県・宇和島・伊予・他ラ下二「いっしに連れていく。供に連れる。はづ、人形・瑠璃の楽屋で使われていた隠語の一つで、上方の遊里などを通して江戸へ伝わ

るのか」* 雪い、滝井上、錦「一欠しふりて家庭的な雰
囲気の中に過して来た速水が」③小さくまとまっ

ているさま。ごんまりしうるさま。・満韓（まんかん）ろどころ。夏目漱石四二「虫の音が聞えだした。足元で少しばかり鳴いてゐる様な家庭的（カティキ）なものではない」④家庭に特に多く起こりうるような。家庭にありがちな。・玄鶴山房芥川龍之介四四「冷やかにこのありふれた家庭的（カティキ）を悲劇を眺めてく」⑤開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてい・とくほん「家庭読本」⑥家庭向きの読み物書。特に主婦や子どもに読ませる目的で書かれた教養書。⑦開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてい・ほう・ハフ「仮定法」⑧英文法の用語。動詞の法の一つ。その動詞の意味する事柄が、仮定ないし要望、願望である事を表わす動詞の形態。↓接続法。⑨算数の問題解決法の一つ。未知の数を適当にきめて問題の数量関係をあてはめ、生ずる矛盾を適当に比例関係に基づいて調整する方法。仮説法。⑩開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてい・ほう・ん「ハクシ」⑪家庭訪問「名」学級担任や家庭裁判所調査官などが、保護者の協力を得るために家庭環境を知るために児童、生徒、少年の家庭を訪問すること。開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてい・らん「家庭読本」⑫新聞、雑誌などに、育児、衛生、料理、服飾、家計、園芸など家庭向きの記事を掲載する紙面。開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてえ「名」⑬無難な事柄。愈（こ）愈（こ）かてえ「名」⑭栃木県安蘇郡26 長野県松本33 ⑮言いそれがかり。神奈川県津久井郡内郷26 ⑯かてえし「名」⑰開闢「名」⑱構つてさの。実。佐賀県92 長崎県西彼郡高島44 対馬豆賀92 杵岐島94「かてし」大分県宇佐郡7 宮崎県西諸県郡62 ⑲樺木。駿河②「かてし」大分県一部24 宮崎県児湯郡36 鹿児島県1 ⑳樺油。長崎県西彼郡西井王島26 カティキテル「名」(カティキ) 体腔から液を排出するために用ゐる管状の器具。特に膀胱（ぼうこう）から尿を体外へ出すために尿道を経て挿入するもの。導尿管。消息。・随筆・夢之代「二小便便を患ふから小便を通せしむる器をカティキ」と云。・イタリヤの歌川端康成「老妻は長年の看病の経験から若い宿直医のカティキルの道入振りを、上手だとか下手だとか文句をけた」・雪夫人絵図（舟橋聖一）二部 鯛の章「尿道へカティキルを挿入するのまで、自分でやったさうだ」⑳開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてえり「訓」㉑開闢互（た）に。大分県日田郡57 宮崎県西田平郡309「かてる」㉒開闢カティキ・愈（こ）愈（こ）かてえり「名」(カティキ) キリスト教信仰を、洗礼または堅信（きしん）者あるいは子どもたちに教えるための書物。もととて頭で教えたところに、文書となつても、問答の形式をとるようになった。

カキズモ【カキ(木)とschizum(カケスモ)】「カテキズ」に同じ。しだりになりしたん二五九一年版六かてきずもに載の(せたる事を読まるべしといふ)とちなりしたん二六〇〇年版一かてきずもとより初訳讀しよだんかなこのはよりかはにもきりしたんのしらすけなはざる事おほきなり」かてきそんじヤ クツタニヤ【「化狂尊者・貨狂尊者」栃木県佐野市の龍江院に伝へられたオランダ人文学者エラズムスの木像。慶長五年(一六〇〇)漂着したオランダ船リーフデ号の船首飾りだったものを、中国で船の創造者といわれる伏羲になぞらえて呼んだ。

カテキユ【名】(英: catechu) 植物染料の一種。カッチともいう。精製したものには阿仙葉(あせんやぐ)という。熱帯のアジア産植物のアカシア、ミゼア、アレカ、ウンカリナなどの幹や果実を煮出して粉末とする。木綿、絹羊毛などの褐色染めに用いられる。かてくさ【樟草】一名植物さんごい(山帰来)の異名・書言字考節用集十六上茯苓 カテササ 俗云山帰来 【同前】

カタトリ【名】(英: Katakori, re: category) ①哲学で、事物を分類する際、もはやそれ以上に分けることのできな、最も根本的、一般的な基本概念(属性)量、状態、関係等)。最高の類概念。範疇はんちゅう。②一般に、同じ性質のものが集るべき範囲部門。範疇。●母子叙情 岡本かの子、お母さんは余りに自分流のカテゴリを信じようとしすぎるやうな気がします 【笑面繪之図 念之】

かてしーのき【名】(因習①つばき(椿)、岐島孤②さくら) 遊芸の師匠のもとに、夏の間だけ土方から集まって来て喰うなる弟子を、蚊にたとえていう語。木下長嘯子書状、蚊よめる 忍路の閑こへたねども夕ぐればつれなかだしや夜半の閑守

かてしよめ【糧政二名】食糧の尽きるのを待つ城攻めの法。兵糧のようう攻め。●椎井広原海一「糧責や勇者の目には殺潰し」かてしッ【火鉄】一名火のように赤く熱せられた鉄。●日葡辞書(Quarta)クワツツ。ヒノクロガネからして瓜鐵【名】大うりと小うり。一説にうりの蔓つる。転じて、血縁関係で連なっていることと、子孫の繁栄することになるとえる。●詩経・大雅騶虞【蘇麟氏貳民之初生】

(詞)助動詞の連体形に付いて、逆接を表わす。…といひながら

「母親によつて似た伯母様があるから、子権と云ふ助刺二つた。」
 「おへもけふらは抜き花の式本や三本はせぬかてて大事なことかほちやもの。」
 「雪落本十界和尚話五にこちらややうな者が馴染になつたから、お前の為此にちなりやせし。」
 かててくわえて、くはてて「採加」掲加「連語」(かてては、動詞かてるの「採」の連用形で、混ぜあわせるの意。あることの上にさらにことを加えて。さらにその上に。おまけに。ふつう望ましくない状態が重なるばあいに用いることが多い。・浄瑠璃、女殺油地獄中かててくはてておかちが煩ひ伯父の饗養、まじ此上かててどうも何を為出さふて加(ク)にて身請けの切端、・滑稽本「浮世風呂」二下「夫に又かてて加(ク)にて、妹のお膝が屋敷から病氣で下がるが」・浮世草子「葉李四迷」三八「搦かてて加へて、朝の薄曇りが甚少下る頃より雨となつて、びしびしよと降り出したので、・婦系図「泉鏡花」前二八「搦(カテ)て加へてお駕の一件が暴露(はれたため)かてて一まぜて「連語」いろいろと、物事が混雑すること。・猿次郎久留木、かててまぜて、色々と日用のこととの混雑すること。とりまぜて「取雑」か「因圓」か) 助動詞「す」の上位に使われる連用形が付いた、に、するにたなぐて、の意を表わす。・万葉一、九五、五、はもや安良児得たり皆人の得(え)難圓(かてて二)すと云ふ安良児得たり(へ)難原鎌足(え)・万葉三、二五三、種日野見行過ぎ勝圓(かてて二)思へば心恋し可古く(え)の鳥見ゆ(へ)柿木人麻呂(え)・万葉五、八四五、うぐむの待ち迎三圓(カテ二)せし梅が花散らずありこそ思ふ嶺の嶺がため(へ)向部石足(え)・万葉一、四三三、八坂波渡き(え)あむて霞み居過ぎ可提圓(カテ二)思つて君を害害寝(あ)むてや(え)ち東歌・常陸」
 〔蘭語〕万葉二、九五など、かてに「かてに」難の字を用いていいたるものは、かてに否定の意を含み、「に」を助詞と解したものとされる。うがてに②
 がてに「採」連語」(かてては、動詞かてるの「採」の連用形が変化したもの)名詞の下に付いて、まじりに「まぜ合はされて」の意を表わす。・享和本新撰字鏡「驚、有骨驚、骨加天爾豆久礼留肉驚、・延喜廿一年、京極御息所宴々歌合「雪がに吹く春風は早けれど」

青山には寒からなく^(一)
 よてに「連語」①連語、かてにの变化した語。②の
 がたな語構成として用いられたとも考えられる。
 ・万葉・五八五九春されば我家(わき)への里の川門
 (かはと)には點子(ふゆち)さ走る君待ち我臣爾友
 テニ二大伴旅人・芳業 四一三七〇 我臣爾友
 は千年ちとせや去しぬる否(いな)をかも我や
 か思もふ君待ち我三爾(ガテニ)金歌入麻呂呂歌
 集出^(二) 二(難かなし)との語形の類似から、
 「かてに」「することに対する」できないの意を、
 含み、「に」は助詞と解したことによる)。できずに
 するに耐えないで。古今 雑下・九六四うき世に
 は門(か)にさざせりと見えなぐになど我が身の源
 でがかにすず平貞文・宇津保保徳 七八 紅の源
 を流して惜しむ。俊藤行基がてにして帰る。源氏
 蓬生今宵も行過ぎがてにとまらせ給へるをいか
 が聞こえさせむ。浄瑠璃伽羅先代萩道行「操あ
 や」とのことさ細道を、分つづつ行くに、在
 (さ)いの女が打まじり、中よさふな連(つれな
 しに)〔園田倉吏上代すでにかてに〕形のはかにが
 てに「形も見られる。鎌倉初にはがてに」形のみ
 かてにぶくろ【糧袋】食いちの時に兵糧ひょうろく
 う)を入れる袋。兵士はこれを腰につける。
 かてみち《名》(むかでみち○百足道)の略から)鉄
 道路線をいう。盗人でさや仲間間の隠語。〔隠語輯考
 からてめし〕「[秘飯]《名》(かてに混ぜる意)米が足り
 ない時、米に麦・大豆類などを混ぜてたいた飯。か
 て。かてい。かてもめん。かしきがて。・談義本
 当世六穿二・さかの釈如もんしう「神道がよいとい
 も両部の神道ではかて飯(メン)さう様もので
 ・洒落本 残座訓「百姓はなを更変業も大かた喰つく
 し、今は麦二ばかり糠ぬかふますまハのかてめし
 ・南小泉村真山青木「一百姓ほとんどじめなのは無
 い、取分け奥州の小百姓はそれが酷い、糞糧(ぼんぎょ)
 を混ぜてたいた」。北海道刊 岩手県刊 宮城県刊
 新潟県刊 飛騨県刊 ⑤野菜などを混ぜてたいた味づく
 飯。ごもくめし。群馬県多野郡240 埼玉県秩父 242 東
 京都府多摩郡79 神奈川県川井市285 〔隠語カテメ
 シ(合飯の義。すなわち、米に、麦または野菜類など
 をカテた飯。俗語考)。園田金全カデシ(岩手)
 かてもんの【秘物】《名》〔厨飯の副食物。おかず。青森
 県19 岩手県遠野町1 秋田県長岡郡5 長野県吾妻郡
 219 山梨県510 静岡県岡部郡060 長野県佐久郡044
 岐阜県61 静岡県新島郡04 新潟県中魚沼郡423 熊本県947 宮
 崎県61 鹿児島県肝属郡04 (かていむん琉球%
 かてもんの談義) 【秘物】《名》かていむん(秘飯)に同
 じに)に青菜を喰べ(貝かお)はいつも木賊(そくそく)

豊年珍話一「猫兒の忠死」今日は編箋して、讀義本
名草子大枕門に立つて食ふことしき、談
たういたひて門に立も人間世のならひなれば」
かどの 尼(あまにも用よう)あり 用事もあるま
いと思ふ人にある。時には用事を頼む必要が出てく
るものである。・謬伝(門の尼ア)にも用あり
〔和漢故事(門脇の姫ウ)にも用あり〕
棒読弓張月拾遺・五四回(年来)としごろ、利勇に
媚諛(こびへつら)ひ、彼が門(カド)の狗(イヌ)と
なりし」
かどの 神(かみ) 家の門を守護する神。かどもり
のかみ。・古事記一上(天石戸別神、亦の名は櫛石靈
神と謂ひ、亦の名は豊石靈神と謂ふ。此の神は御
門之神みかどのかみぞ)
かどの 神棚(かみだな) 正月、門にまつる神棚。
《季・新年》・俳諧・諸語抄学抄初春・門神棚(かど
のかみタナ)・俳諧・増山の井・正月門の神棚 在
家の妻戸に棚をかまて神を祭り夜はかはらけに
灯をそなへ侍る事也。・妻木・松瀬青々・新年・故郷
は門の神棚作り也
かどの 春(はる) 門口(かどぐち)にただよう新春
の氣分。・俳諧・風流歌一「寛永や十八公の門の春
《全翁》・雑俳・柳多留一七門(か)の春跡から
も又跡からも」
かどの 外(は)かなる「三車みづぐるま」〔法のり
の車〕「かたく火宅の車」に同じ。・榮樂秘抄抄
二・法文歌「かどのはかなるみづぐるま、二つは乗
らむと思はえす、大白牛車に手をかけて、直至道場
訪ひ行かへす。・光悅本謡曲・軒端梅「門の外法の車
の音きけば、我も火宅を出でにけるかな」
かどの 松(まつ) 「かどまつ(門松)に同じ。《季・
新年》・世説問答一正月・問て云、「一日よりしはが
家元の門の松とてたて侍るは、いつごろよりはに
まれる事ぞや」・俳諧・曠野一「歳旦「月雪のため
にもしたし門の松去来」
かどの 者(もの)「かど(門)⑤に同じ。
かどの 札幌(いちよう) 年賀の客に名前を記し
てもらうために、玄關先または店先に備えておく
帳面。年始帳。
かど 広し 一族が大勢になるさま。一族が繁栄する
さま。・竹取「此の世の人は男は女にあふ事をす
女は男にあふ事をす。その後なん、門ひろくもな
り侍る。いなかさる事なくてはおはせん」
かど 分かつ 分家させる。・大鏡五・道長上「さて、
不比等のおとこの男子二人又御弟二人とを四家と
なつて、みな門わちたまへりけり」
かど 分ける 一族が分かれる。分家する。・榮花初
花新しき御子の御喜びに、氏の上達部引連れて
拝し奉り給ふ。藤氏ながら門わかれたるは列にも

立ち給はず、大鏡一座ひとつすちにぞおは
 あれど、かどわかれぬれば、人々の御こころもち
 も又それにしたがひてここにこになりぬ。
 かどを出いす ①家を出る。 ②出家して僧
 や尼になる。夫木三四かどをいではたづねて
 ゆかに清水寺名にたがはずは住みやとまると源
 忠房。
 かどを売る 門口に来て、物の名を声高に呼んで
 売る。・浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡・上かどをうる声山
 草やちよと祝ひまじよ。うら白ゆづり葉ごま
 めて御座んせの春がに。
 かどをさす 門の扉とびらをしめる。錠をおろ
 す。万葉一・二五九四行かぬ吾(む)を来むと
 か夜も門かど不閉(ふしむ)あはれ吾妹(わが)が待
 ちつあるらむ作者未詳。・色葉字類抄・鎌か
 とサス。・虎明本狂言・節分ひききれ小二郎、かどど
 こそふにかかどこそふに、こそふならささひ。〔開
 色葉文明〕
 かどを広く 子孫を多くもって一族を繁栄させ
 る。・源氏・薄雲・屏くとも、猶このかどひろげさせ
 給て、侍らずなりなむ後にも、数まへさせ給へ。
 ・源氏・幻それこそにこそは、かどはひろげ給はめな
 どの、給ふ。
 かどを盡(つく)ふさぐ 不義理などでその家へ行きに
 くくなる。敷居が高くなる。・狂言記・昆布敷・最
 早方うのかどをふさげた所、どこへ無心はいう
 やうもない。〔開國文明〕
 かど〔廉名〕名(「かど、角」と同系か)数えたるべき
 箇条、条理、理由。まど、目につく特徴。・花鏡比
 判之事・面白かどを少々(すくなすく)と見せて
 見物者の心を引き驚かして。・牧民金鑑・御代官
 心得方寛政五年八月御入御に過たは無之、何共恐
 め、近來川々御昔諸の御入御に過たは無之、何共恐
 入候哉。人情本・閑情未摘花・五・二九回今朝・態々
 (わさわさ)参った旨意(かど)は。・和英語林集成初
 版(Kuroki)カドニ ヨッテトガワ(モウシツカド)
 ・真景累々湖三遊亭朝朗六七・何等の廉(カド)
 を取つて左様なことを仰しや。・当世書生気質序
 内道進「どこやら愁ひ良(かど)に見らるる廉(カド)
 言葉にはあらねど。〔開國語カド(角)の義和訓
 栗言葉の根しらべ 鈴江潔子・大言海。 〔開國會之〕
 因會之①
 かど〔鰯〕魚にしん(鰯)の異名。・季春・四季
 かど二月しん(うし)だつとはいへるも、ささしま
 物語のうを心ふとの御まはりの下しかれて、書
 言字書節用集五・鰯・カド 未詳・浜荻(仙台)「か
 どはしたるをにしんといふ。 〔開國①にしん〕
 郡山県浜宮城泉岡 秋田県南秋田郡 福島県石城
 岩手県浜 ②さんま 三重県東牟婁郡 〔開國①〕蝦夷
 語か、東北に産するところか鰯の字を書く(名言言

通・大言海。(2)クハダウバ(黒肌魚の義)日本語
原字【片葉田】 (附圖) 圖畫

かど【川所】^①名 因^②泉。青森県南部112 ②川辺の
子 親出現

洗い場。岩手県123 宮城縣153 (かど) 青森県津軽15
秋田県鹿角郡155

かど【名】植物。こはね(河骨)の異名。 因^③植物。
秋田県鹿角郡155

かど【上土】^①名 (かどとも) ①下界。大地。この
国土。 ②土名。 統日本紀宝龜二年正月乙酉
錫命上玄・君臨下土。 本朝文粹一・勸学院
名題文・慶滋保胤・誠謙・樂遊宴於下土之性・尙惡
違・罪累於上天之畔・開化本論・吉岡德明上・
「下土」の下土を覆育するが即ち仁なり、君主の九重に坐して
よく宇内を統御するが即ち仁なり、改正増補和英
語林集成・Kaoカド 下土・詩経・邶風・日月・日居
月諸・照臨下土・ ②片いなか。 辺鄙(へんぴ)。
漢書・劉縯傳・新從下土来、未知朝廷体」 ③
やせた土地。

かど【下奴】^②名 ①召使。 ②代名詞的に用い、
自分をへくくだっている語。また、相手のものをしっ
て呼ぶ語。

かどとク・【火度】^①名 陶磁器などを焼く窯(かま)の
温度。素燒き六〇〇〜七〇〇度、素燒き六〇〇〜八八
〇度、焰器つき九〇〇〜四三五四度、磁器一八
〇〜四六〇度くらい。 焼成熱度。 因^②圖畫

かどとク・【華土】^③名 国の美称。 みことな国。 りっ
ばな国。 統日本紀・延暦九年五月庚午・己既洗濁
俗・更歟・清化・志同内民・風仰華土・
かど【家奴】^④名 ①召使の男。 男家僕。 漢書
地理志・男没入爲其家奴・女子爲婢」 ②小作人。
かどとク・【過度】^⑤名 ①(行動) 普通の程度を越え
ていること。 また、そのさま。 いきすぎたさま。
みはこれ。 庭訓往来・房内過度・ 西国立志編・中村
正直記・一二三・格伯田コブデンの書を説事の過
度(注・ホドコより)を見て、これを戒めけるが」
義血俠風・泉鏡花・五・憐むばし過度・クの馳驚
(ち)に疲れ果てたる馬は」 青年森岡外・四・過
度(ク)に緊張した神経が、どんな微細な刺激にも
も異様に感応する。 春秋左伝・襄公四年・使師
保之・勿使過度」 ②(する) 言語。 生死の海
を渡つて悟りの彼岸に到ること。 度。 元久法語・
なにごとく生死を過度すべし」 無量壽経上・過
下度生死・願・不・解脫」 因^③圖畫

度々 文・明・天・正・書

と【名】昆虫じむし(地虫)の異名。 丹波通経・蟬

贈(すけ)加佐郡⁶³) がと、因圖かたつむり蝸牛。京都にタツ「画図」[名] 絵や図をかくこと。また、その絵や図。絵圖。図画。がす。「和漢朗詠下王昭君」「愁苦しうこ辛勤いんきんにして顚倒せうとの」し尽きぬれば如今(いま)ぞ却てて國元ぐえつの中へ」と似たる『白居易』・中右記元年九月十九日或人云、法橋明順一日病歿、俄入滅、年八十余は松仙師巧画家者・平家一二代后清涼殿の画図の御障子(しゃうじ)には、昔金岡かなかをがかきたり遠山のあり月のもありとなく、「読本椿説弓張月拾遺附言当寺におなじ震影の画図(タツトあり)、西洋道中膝栗毛糸線生寛一四上「中央に柱を用ひず内面に五彩の画図(タハ)をもつてこれを飾り。」

かと「助(因圖金額を表わす語に付いて、だいたいのくらいという意を表する)。ほど、百円がとくささい」福岡^{90c} 佐賀県⁹¹ 長崎県⁹⁷ 岐⁹⁸ 鹿児島県⁹⁹ 《》かつ鹿兒島喜界島⁹⁹

かどあきんど《商人》商品を持って売り歩く商人。浄増地・鬼鹿毛無志章三門商人カドアキンドの光りに来たか。

かどあげ《開門明目》因圖本家が隣家などへ年頭の挨拶に行くこと。徳島縣三郷郡⁸⁷ かどわけ静岡縣周智郡氣多山⁹⁴ 高知縣土佐郡土佐川口⁹⁵ かどあんどう《戸燈籠》家の屋敷などを書き門口にかけて目印にしたあとん。浄増環心中天の網島⁹⁶ 空十五夜の月さへてひかりはくらきがごとんとやまよと伝兵衛を一文字がどこだい。かとう勾引拐名動詞かこう(勾引)の連用形の名詞化)かどわかすこと誘出すこと。また、那人。俳諧新虚栗下大妻吹胸に古今の句(カドヒ見ふ卓亭)改正捕補郎英語林集成【Katodhi カドヒ 歌】誘拐。誘拐者

かどい《形》因圖の悪がい。しばしい。静岡県田方郡⁷² 神奈川県津久井郡⁸² 山梨縣南巨摩郡奈良田⁵⁰ 犬伏猫などの人にたとへる。福島県荒良田^{51d} 大小な勾引した他サ四女子供をだまして連れ出す。かどわかす。誘拐する。日葡辞書(Katohi ikashari atai katai)イヂス

かどい【角石】[名] 国火打イダシ。青森縣¹¹³ 盛岡¹¹³ 富山縣瀨波¹³⁷ 信州¹⁵³ 愛知県北設楽郡¹⁵⁰ 愛媛縣¹⁵⁹ 福間縣女郡¹⁶⁰ 長崎縣南高来郡鉄砲町¹⁶² 大分縣北海部郡¹⁶⁷ 鹿児島¹⁷⁰ 奄美大島古仁堅¹⁸² 鹿児島種種子島¹⁸⁷

かといって《運送》(そらだからといって)の意。接続詞的に用いられるある事柄をあげ、それから当然予想される対立的または附加的な事を打ち消す場合に用いる。そうかといった。竹沢先生と云ふ人《長与善郎》竹沢先生東京を去る四「その愉快相なグ都府も召し」がと、因圖かたつむり蝸牛。京